



hida

広報

ひだ

町木



第94号
肥田町
まちおこし
推進協議会

一人ひとりの防災対策について

副自治会長 山本 長孝

日本は世界でも災害大国とよばれるくらい毎年のように台風、大雨、洪水、土砂災害、地震などの災害がたくさん発生しています。自然災害は、時として、想像を超える力で襲ってきます。そのためにも、日頃から防災対策をしておくことで、被害を少なくすることができます。

しかし、肥田町防災会として今年計画しておりました防災訓練は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点からやむを得ず中止となりました。

防災訓練に代わり、「一人ひとりの防災対策」について「政府広報オンライン」より抜粋させていただきます。参考にしてください。

一 防災対策で重要な「自助」

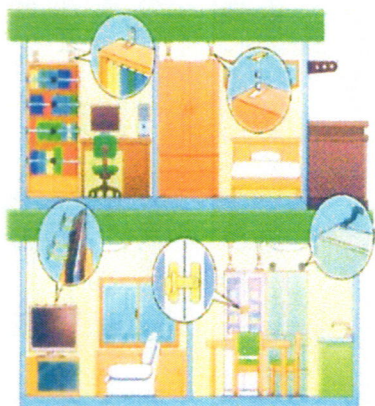
基本となるのは「自助」、自らの命は自らを守る意識を持ち、一人ひとりが自分の身の安全を守ること。

また、平時からハザードマップを確認

し自宅の災害リスクを認識し、その被害をできるだけ少なくするために必要な対策を講じること。

二 家の中の安全対策

大地震が発生したときは、「家具は必ず倒れるもの」と考えて、防災対策を講じておくこと。



三 地震が発生したとき

地震はいつどこで発生するか分かりません。様々な場所、ことにどんな行動をしたらよいのかを知っておき、地震が起きた際に身の安全を確保できるようにしておくこと。

四 ライフラインの停止や避難への備え
電気やガス、水道、通信などのライフラインが止まっても自力で生活できるよう、普段から飲料水や非常食などを備蓄しておくこと。

「災害時に備えた備蓄品の例」

- ・ 飲料水 一人一日二リットルを目安に、三日分を用意
- ・ 食品 ①飯（非常食アルファ米など一人五食分を用意）、ビスケット、板チョコ、乾パンなど、一人最低三日分の食料を備蓄
- ・ 下着、衣類
- ・ トイレットペーパー、ティッシュなど

また、「避難袋」はどんな状況になってもすぐに持ち出せるように、玄関脇、廊下、リビングなど目に付く場所に置き、災害時にはすぐに掴んで持つて行けるようにしておくこと。

「非常持ち出し品の例」

- ・ 飲料水
- ・ 食料品（カップめん、缶詰など）
- ・ 貴重品（現金、健康保険証など）
- ・ 救急用品（消毒液、常備薬など）
- ・ 軍手、懐中電灯
- ・ 衣類、下着、毛布、タオル、洗面具
- ・ 携帯ラジオ、予備電池
- ・ 石鹸、ウェットティッシュなど

「感染症対策に使用する衛生用品の例」

- ・ マスク、体温計
- ・ 手指消毒用アルコールなど



五 安否情報の確認方法を家族で決めておく

携帯電話を持っていても、災害時は回線がつながりにくくなり、連絡が取れない場合があります。日頃から安否確認の方法や集合場所などを家族で話し合っておくと。

世代をつなぐ美しい農村

コロナ禍の中、春秋を経て本格的な秋となりました。稲刈りも終わり、今年の収穫はいかがでしたでしょうか。

春先からのコロナ禍、協議会の様々な活動も自粛・停滞が求められました。しかし自然界の、いや人為的なことも含めて、環境の問題は待ったを許しません。河川や用排水路の草木や汚泥堆積はもろろん堤防や公園の雑草は相変わらずです。

このため、例年とは違った創意工夫により、河川や用排水路の清掃、堤防や公園の草刈りが行われました。ご参加・ご協力いただいた皆さん、お疲れさまでした。

追弔会

平和な未来を祈願

八月三十日、崇徳寺において自治会並びに福寿会合同による戦没者並びに物故者追弔会が開催されました。コロナ禍という特殊な状況の中、参列者は遺族の方々と役員の方々に限られました。誌面を借り、ご冥福と今日の平穏な生活の日々に感謝申し上げたいと思います。

日本は近代になって幾つかの戦争を行い、多くの命を失ってきました。神の国という言葉を使って戦意を高めてきた時代もあつたと聞きます。国士が戦場となつたのは太平洋戦争だけなためか、戦争の悲惨さを現実として受けとめなかつたことが、無謀な戦争に突入する背景となつたのではないのでしょうか。戦場となつて始めて、国土の焼失や戦争被害者の増加を眼前のものとし、戦争を繰り返してはならない”という誓いを新たにできたのだと思います。

報道によると、戦後75年、戦争を知らない世代も85%となりました。遺族会も会員減少が続いているそうです。この肥田町も同様で、遺族の方々の遺族意識が薄れるなど、平和を願い感謝する心をいかにつないでいくか、戦没者追弔会の在り方が問われるようになりました。

他方、福寿会においては、新たな入会

者が少なくなる中で、要介護となつた方の退会も増え、福寿会追弔会も模索の時代に入ろうとしていました。

追弔会とは何なのでしょう。僅か三百名強のこの肥田町で行う追弔会はどうあるべきなのでしょう。

ある日の折り返し広告に一つの考え方が書かれていました。要約しますと、①参加者の連帯感 ② 先人を祀る意識の継承 ③ 生き方の手本 ④ 感謝や恩義の心を伝え、世代を安定的に継承 ⑤ 先人の心を受け継ぐ ⑥ 信用や安住の確保、に役立つというものでした。信仰の在り方は一人ひとりに違いがありますが、参考となる考え方だと思います。

人生の先輩としての福寿会の皆さんや地域のリーダーとしての自治会役員の方々が、追弔会を通じて、戦没者を含む全ての物故者に感謝しつつ、今ある



喜びに思いをいたし、未来へ心を繋ぐことができれば肥田町にとつて素晴らしいことではないかと思えます。

金刀比羅神社本殿補修

社守 森野光夫

昨秋、拝殿修復委員会を立ち上げ、専門家の意見を踏まえた改修案を一月の臨時氏子総会に提案しましたところ、全員の方のご賛同をいただきました。

修復にあたりましては、何かと出費多端な時期、氏子の皆さんから多額のご寄進をいただき、八月末には無事改修を終えることができました。



今日まで私どもを守っていただいた金刀比羅神社のご加護を勇氣、元氣の支えとし、また、肥田町の守護神として未来に引き継いでいく思いを新たに、完了のご報告とお礼とさせていただきます。

町民の声

一、いつまでも住みよい肥田の町へ
“老人力を生かす”

肥田を愛するY

確かに肥田の町の高齢化33%は切実な現実。60歳以上の方々は、国の経済成長期に身を粉にして頑張つて来られた。その人間力の魅力を今の新しい局面ですっかり力を貸してほしいところ。

でも、例えば自治会長を終えられた方が直ぐに老人会の役職への推挙の抵抗感。ここは免責の期間を設けてでも老人会の中からの応援と指導に力をいただき、老人力を盛り上げてほしい。町の活気に繋げてほしい。

というのは、今までは、とかく老人会は自治会の傘下にあつてという考えで運営されてきたと理解していますが、今の時代は、総てに同じレールを走る連結車両で、我々の町を縦断的にも横断的にも力を合わせて住みよい町へ導いていく姿勢が即求められています。今の時代、次の駅までの時間は限られています。防災福祉、環境、共助は高齢化少子化の進捗中では待つてくれません。

だから、世間にある中高一貫校の力強さのように、老人会の在り方は、老人会参加は義務教育に匹敵するとみなして、自治会会則の改善へも一歩踏み出すべき時ではないでしょうか。(細かいことですが、老人会の会費の支出は会食がメインの目的、当日の参加者の自己負担で分かりやすく気持ちがいよい懇談の機会が膨らめば更によいと感じています。)

コロナで減殺される温もりのある触れ合い、助け合いの心は、町づくりの基本として絶対守り通していきたいものです。老人会の再生に期待しています。優しい福寿会から本来の老人会として老人力に期待しています。

二、肥田町の活性化に向けて

匿名

① 年始あいさつ会の活性化について

以前は、隣組内に元旦の早朝一軒づつ玄関を訪問してあいさつに回っていました。元日の朝大変なので、公民館で年賀のあいさつすることになった。報告では年始あいさつ会の活性化を上げていながら廃止したのは、報告の無視であり復活を求めます。

② 自警団について

団員10名となっているが、現在定員割れの状態が続いている。肥田町に居住しながら30歳前後の方で自警団の経験が無い方が居られるから、自治会長の協力の下10名は確保して欲しい。特に、町外から入居された方が漏れています。ゲリラ豪雨や台風・地震等の災害時に行政に頼っている駄目で、自治組織で対応できる状態を確保して欲しい。自警団員に就任し、肥田町の町民との交流や理解が生じるので、45歳くらいの未経験者は5年以下で経験して、肥田町の理解と協力を深めて欲しい。

③ 空き地対策について

少子高齢化が進む中、空き家や空き地が今後増大すると予測される中、空き家や空き地が狸やハクビシンの住み家になっている上、蚊等の発生や角地は交通安全上も問題があり、所有者に狸やハクビ

シンの侵入防止策の実施および雑草の刈取は年3回以上実施するよう彦根市とも連携して、取り組んで欲しい。

④ 小宮祭りについて

町内2つの神社に分かれている中、唯一の町内上げて取り組む祭りであり、参加者が少ないから巡行を止めるのではなく、年齢制限を外して町民全員が取り組む祭りにして欲しい。老人会員は後ろからついて回ることも考えて欲しい。

⑤ 老人会等について

老人会等は、任意参加で自治会長経験者が退会されている。老人会等は、町内の清掃活動等いろいろ奉仕活動を実施してもらっています。肥田町に住みながら自分のことだけを考えるのではなく、肥田町に住んで良かったと言えるまことにするため、全員参加を自治会で決める必要がある。皆さんに世話になって今日の自分があるということを自覚して欲しい。

⑥ 放送設備について

公民館に放送設備があるが、町内で聞こえない区域があるので、これだけの対応では不十分であり、メールの併用等の対応が必要である。

三、肥田の氏神さんについて

氏子より

かねてから町の氏神さんについて、それぞれに地域の総社から独立も考えるかと

いう話が出ていましたが、その歴史から紐解いていきたいと思えます。

そもそも町で氏神さんが育ってきたのは、地元の地主さんや素封家(そほうか)が、自然の災害から町を守る、家内の安全を祈願するため、地元の方々の協力を仰ぎ、お宮さんを請い受けてきたことに始まるものです。上町の神社を例にすると、讃岐の金比羅山の神様をお誘いし、神社が建てられたものです。

一方で中仙道の要衝にある天雅彦神社は、国史現在社として天応元年(七八一年)に創立され、勝運の強い社として崇められ、貢献してきたとされています。当時から政治が動いたかとも思われ、郷社から県社へと地位を高め、内務省が動いて地域の社の統合が進められています。こうした経緯から肥田の金比羅神社も天雅彦神社の傘下となり、お祭りも権威の象徴のように大きくなったと聞きます。

住吉神社も同様で、愛知川の豊満神社が、地元で良質な竹が大量に算出し、三韓征伐の軍旗の旗竿として活躍したことから社格を高め、地域20数社を統合、傘下となったものです。

大手の社は地元産業の繁栄に助けられ、多くの寄進を得て、派手な運営もできていましたが、社会情勢の移り変わりもあり、零細な氏子の人々に運営を任せ形になっていきます。

こうしたことから、通常の運営経費に

加えて、社屋の老朽化による改修でもあれば、一般氏子の負担は大きくなるばかりで、これが現状ではないかと思えます。

また、若い人々の間では、ここでも価値観の変化があり、例えば、縁結びや進学、家内安全などは信仰祈願の相手が変わり、地元の氏神さんへの日常の崇敬の念が薄められ、なくなってきたのではないのでしょうか。

肥田の町には、金刀比羅さん、住吉さん、火伏の神、そして山王さんもできて、この



際、本当日常身近な四社に、地元の住民として纏まって肥田町の

安全祈願に徹することが、全ての町の祭事ばかりでなく、自治会の祭事の上でもパワーアップし、心の統合も更に進められるのではないのでしょうか。少子高齢化で今後人口減少が進み、価値観の多様化の中で薄れる信仰心の中、最も大切なことは、歴史や伝統のあるこれらの神社を粗末に扱うことなく、後世が負担なく継承できる基盤を守っていくことだと思います。

併せて、増え続けていくであろう運営経費も、大社から離れることで地元へ厚く有難さも身近になると思われ、令和の年明けの機会こそ意思統一を進めることが望まれる唯一のチャンスであると思います。



四、高齢化社会の支え

匿名

60歳、70歳、80歳、いつから老人になったのか。自分でも分からない。いつからか病院通いをするようになり、いつからか高いところが怖くなり、いつからか重いものが持てなくなつた。いつからか足が重くなり、いつからか杖を必要とするようになり、いつからか歩行器を使うようになった。今では、デイサービスに通い、家でも外でも孤独を感じ、生きているのさえ嫌になる。

子供も大きくなった。孫もできた。子供は忙しい。若い者には若い者の生活がある。母屋と離れ、本当に近くに住んでいるけれど、一緒にいれれば、うつうつしいことも多い。愚痴を言い、愚痴を聞く。

テレビは別、食事も別。一緒に居るんは何かあったときだけ。子供の生活を邪魔してはいけない。賑やかな家庭と言われるけど、別々の家庭と同じだ。年をとってできないことも多くなった。重いものが持てない。棚のものが取れない。買い物に行けない。ゴミが捨てられない。料理ができない。できないことが一つずつ増えていく。これからどうなるんだろう。不安が大きい。

でも、私たちはまだまし。夫婦ともまだ元氣だし、子供も近くにいます。年寄りだけの家や一人住まいの人もいます。あの人たちはどうしているんだろう。自分もいつか独りになるだろう。できないことももつと増えていくだろう。

昔は「醤油がなくなった。貸して。」「お米がなくなった。貸して。」「法事をするんだけど手伝つてくれない。何をしたらよい。あれにしたら、これにしたら。」「うつとうしいけど、人と人が繋がつていた。近頃は、付き合いが少なくなつて気は楽にはなつたけど、近所も知り合いも出入りする機会がなくなった。だから、助けてもらおうとしても、助けてと言えない。言う相手もない。本当はちよつと助けてと思うことが多いんだけど・・・。週に一回、一時間でも顔を見せてくれて、世間話をして、あれをお願いでできないかな。これをお願いできないかな」と無理を言えたらどんなにうれしきことか。

人は、その人の健康度、境遇、環境によつて、それぞれに思いが違います。しかし共通して言えることは、誰もがいつかは身体が不自由になり、不自由さが増せば増すほど頼れる人が欲しくなり、寂しさが増せば増すほど話し相手が欲しくなります。

身体の不自由さは、介護保険でヘルパーさんを頼むなど、可能な限りの支援を受けることができます。でも、心のサポートは介護保険ではできません。日常の話し相手や身近な困りごと、例えばゴミ捨てやちよつとした頼みごとは介護保険ではできません。かと言って、誰彼となく他人に頼むこともできません。日ごろから培われた人間関係こそ、その時にものを言うのだと思います。もちろん、お互いそのような状態にならないよう、日ごろから予防することがもつとも大切ですが・・・。

だから、高齢者になつても社会参加できる人はできるだけ長く社会参加することが大切だと思います。同時に、地域での日ごろからの人間関係を維持向上させることも大切で、手間暇かけた思いやり

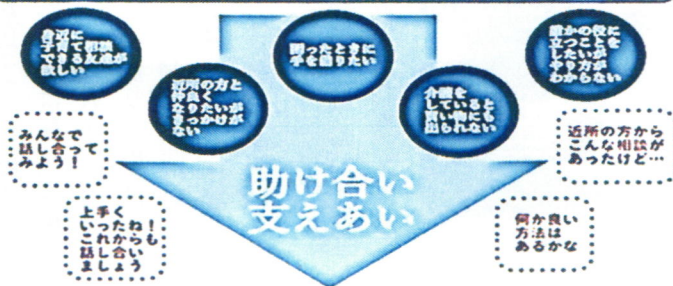
の人間関係を培っていくことが重要だと思います。心地良い引っ張り具合の絆を育てたいものです。



この肥田町では、かつては福寿会が熱心にサークル活動を行っていました。参加する人には負担感があったのかもしれないですが、楽しさも感じていただいていたようです。今は、高齢者がずいぶん増えているにも関わらず、サークル活動は衰え、福寿会の会員も減少するという異常な状態になっています。福寿会として、高齢者が高齢者による高齢者の福祉を担う役割を果たしていたかつての姿は薄れ、今は存在自体が危うくなっていると感じるのは私だけでしょうか。

行政では、全国的に広がるこのような実態を踏まえ、自治会を中心とした地域が福祉を担うよう要請しています。果たして、これがこの肥田町で可能なのでしょうか。決して簡単ではないと思います。まずは高齢者が自らの問題として立ち上がり（高齢者相互支援による共助）、それを地域が支える（行政に頼りながらも地域がこれを補完する公助）、その姿がもつとも大切だと思います。老人会の在り方、それを支える地域福祉の在り方をみんなで考え、その仕組みができることを願っています。

今、地域の中では隣近所の付き合いが薄くなり、孤立化が進み、いろいろな問題が地域で起こっています。



安心して暮らせる地域(まち) みんなの幸せ

生き物を大切にしよう

今年はコロナ対策のため、自然の生き物を通して自然を大切にすることを養う、そんな思いの活動も実施できませんでした。そんな中、子供たちが好きな生き物をテーマに作文を書いてくれました。

六年 松枝義陽

三年 松枝純平

カマキリとの出会い

ある夏休みの日、車の中にカマキリがまよいこんできました。逃げないので飼うことにしました。カマキリのことを調べて、メスだとわかりました。エサはバツタやヨーグルトを食べます。毎日、水をあげて大事に育てています。

六年 薩摩杏

動物

私は犬を一匹飼っています。その犬はとても大事です。猫が二匹いましたが、その二匹とも死んでしまいました。最後の一匹なので、これからも家族として一緒に過ごしたいです。

六年 大村璃央菜

私の家では、金魚を飼っています。昔はもつといたけど、病気などで死んでしまい、今では一匹になってしまいました。その金魚も病気がりましたが、父がなおしてくれて元気になりました。これからも大切に育てていきたいです。

五年 松山真愛

私は、夏休みの間に、妹とプリンを作りました。なぜ作ったかというところ、家族に二人で作ったデザートを食べてもらいたかったからです。プリンができて、自分で食べようとしたら、たまごの味が多すぎて、ちよつと失敗したけど、お父さんがそのプリンを食べて、「おいしい！」と言ってくれたので、うれしかったです。だから、今度はちよつと失敗しないように、デザートや野菜を作ろうと思います。

四年 宮川柚姫

私が大事にしていることは犬です。名前はこちゃんといひます。メスです。こちゃんは、私がうまれる前から家にいます。もう十二年生きていて、人間でゆうと六十八歳で、おばあちゃんです。こちゃんは、とてもあまえんぼうです。おこられたり、うれしいときは、おなかをみせます。アキレスのおやつが大好きで、自分がいいことしたらおやつをおねだりにいきます。くいしんぼうなこちゃんです。こんなこちゃんだけでも長生きしてほしいです。

四年 伊東愛祈

私の家には今年で十三さいになる犬がいます。私がうまれた時からずつとそばにいてくれる大切な家族です。さいきはとしをとつてしまつてねていることが多いけれど、これからも元気で長生きしてほしいなあと思っています。

四年 元持愛菜

わたしは家で犬を飼っています。名前にはモコです。休みの日にはおさんぽをしたり、遊んだりしています。今はとても暑いので、せん風機の前でごろごろしています。そのすがたがとってもかわいいです。

四年 本持真宏

家で育てた野菜

家でトマトとおくらを育てました。ママがよりうりしてくれたのでおいしかったです。まだ育てた野菜があるので楽しみです。

好きな生き物

好きな生き物はサメです。ぼくはサメが好きで、生まれかわるならサメになりたいです。あと、サメを買いたいんです。

三年 松山朝華

わたしは8月の間に家のおにわで花火をしました。でも、多く花火をしたいから、お父さんとあねとわたしで2回花火をしました。とても花火はきれいでした。でも、うち上げ花火でけけんことがおきました。でもたのしかったです。

二年 本持瑚子

みんなでそだてたいせつなやさしいをそだてています。8月29日に、はじめてにんじんがぬけました。うれしかったです。わたしの家のやさしいがいちばんおいしいです。もつともつと大きくなつてほしいです。これでおわります。

二年 元持碧葉

ぼくがかつている金魚 ぼくは家で金魚を二ひきかっています。三年前にちかくのおまつりですくいました。まいあさ金魚にえさをあげるのがぼくのしごとです。これからもながいきてほしいです。

一年 鶴野未瑚

わたしのあさがお

わたしがそだてているあさがおは、むらさきとびんくのはながさきました。まいにちみずやりをして、かんさつをしています。

一年 本持大和

頑張つて育てたアサガオ

ぼくは一年生になつて初めて育てたアサガオがたくさん花を咲かせたことがとてもうれしかったです。毎日頑張つて水やりをしました。毎日花の数もかぞえたりしました。今は、毎日タネとりをしています。二年生になったら、どんなのを育てるのが楽しみです。

お悔やみ

安らかに眠りください

伊関 展子さん 享年八十四歳

(令和二年八月二十五日逝去)

ふるさと歴史探訪記 10

高瀬俊英

感染症と肥田の歴史

新型コロナウイルスの感染でうつつという日々が続いています。

今年五月十七日付けの朝日新聞、「疫病と日本人、戦いの物語」は詳しく疫病の歴史を紹介していました。

特徴的なことは、感染症は大昔からあり、主な感染症は起こり始めて二、三千年続かないと治まらなかったということだと思います。

四千年前の鳥取県にある縄文遺跡からは、人骨から結核の痕跡が見つかっていますし、百年前に流行したスペイン風邪は、大正7、9年の二年間猛威をふるい、国内で39万人、全世界で5千万人の人々が亡くなったといわれています。

二

奈良時代、肥田に住住し、近江大領(注1)を勤め、長野の大贖神社の境内にあったといわれる郡役所で仕事していた大友夜須麻呂が亡くなったのが天平十年九月、七二八年で、天然痘が大流行した七二五、七二七年の翌年でした。この年、

平城京で政治に携わっていた藤原四兄弟(注2)も相次いで死去するなど、人口の三割前後、全国で百万から百五十万人

の人々が亡くなったといわれています。七三四年には大地震に加え、旱魃や飢饉も起っていました。

中央と交流のあった大友夜須麻呂が天然痘に侵されて亡くなったのかどうかはわかりませんが、肥田もかなりの惨状だったと思います。夜須麻呂の生前の徳を崇めて住民が崇徳寺を建てたとありますが、仏をおまつりして惨状回復の祈願をしたのではないのでしょうか。

三

前掲の朝日新聞は、一八五八年(安政五年)コレラが流行して、江戸で十万人が死亡、一八六二年(文久二年)には、はしかが大流行して江戸で数万人が亡くなったとしています。江戸時代、一生に一度はかかる三疫病として、天然痘、はしか、水ぼうそうがあり、それらの克服のため涙ぐましい努力が語られています。ワクチンがなかった時代ですので、肥田でも例外はなかったと思います。

崇徳寺本堂南の墓地に肥田の各地から集められた石地蔵があります。一石に二体、二体の地蔵が彫られている石地蔵がありますが、感染症の犠牲者供養のものではないのでしょうか。

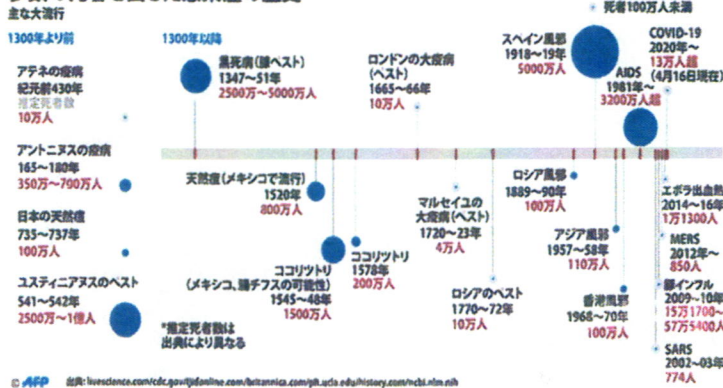
肥田上町の大太鼓は文久二年に造られたといわれています。文久二年というとはしか大流行期にあたり、平癒を願って肥田の住民は大太鼓を製作し、神にささげお祭りをしたのではないのでしょうか。

苦難の時期は必ず終わります。天然痘で苦しんだ奈良時代も、その後天平文化の華が開きました。江戸時代の疫病も、末期から明治にかけて武士のいない城下町で肥田は栄えました。

注1 律令制における職名の一つで、郡司の最高位

注2 奈良時代初期に持統・文武・元明・元正の四代天皇から絶大な信頼を得、官僚として有能だった藤原不比等(鎌足の子)の息子、武智麻呂(むちまろ)、房前(ふささき)、宇合(うまかい)、麻呂(まろ)のことをいう。

多数の死者を出した感染症の歴史



編集後記

(森田喜久雄)

新型コロナウイルス発生から10ヶ月。第一波終息と言う間もなく第二波。感染は続いています。世界では二百十三か国・地域の二、三百万人超が感染し、死者も百万人を超えました。地域の諸活動も停滞するなど、社会の営みが止まり、コミュニケーションも崩壊の危機にあります。いつまで続くのか、このコロナ。一日も早い終息を願わざるを得ません。

こうした中、京都市内のMS患者が医師2人に報酬を払い安楽死する事件が発生しました。MS患者の苦しみは想像を絶するものがありますが、医師の行為はいかなるものでしょう。根本的な問題は、MS患者はもちろん病氣や高齢者など、様々な苦難を抱える人々に対し、幸せに生きる権利が保障されていない社会のあり方だと思っています。本誌面の町民の声でも、老人会のあり方や地域福祉の問題が提起されています。私達に何ができるのか、振り返ることができればと思います。

この秋、政治は大きく変わろうとしています。長期政権を誇った安倍内閣も菅内閣に引き継がれました。森友や加計、桜、検察人事の疑惑は残されたままです。アメリカでは大統領選挙が行われます。世界の秩序を変え、中国の覇権に立ち向かい、相互に領事館を閉鎖するなど争いは続いています。共に手を携え、共に栄える世界はいつやってくるのでしょうか。